

Jalan Jalan インドネシア

第59回「からゆきさんから日本兵までが静かに眠る

ジャカルタの日本人納骨堂、毎年春秋に慰霊祭」

インドネシアの首都ジャカルタ中心部、タナアバンのジャティ・プランブラン墓地の一角にある「日本人納骨堂」には明治期に渡ってきたいわゆる「からゆきさん」から太平洋戦争中の日本軍兵士、平成の物故者ら約 280 人の遺骨、墓碑が収められ静かに永久の眠りについている。

ジャカルタ日本人会の主催で春と秋の年2回（3月と9月）に、慰霊祭が挙行政され、普段は閉じられている納骨堂の扉がこの時に限って開かれ、内部を見る機会となる。

慰霊祭には25年以上の長きに渡り長野県久遠山延壽院の伊佐榮豊住職がジャカルタを訪問して読経と法要が厳かに執り行われてきた。

同墓地はキリスト教徒中心の墓地だがイスラム教徒が多数を占める国柄、同墓地近くのイスラム寺院から礼拝を呼びかけるアザーンの声が朗々と響く中での伊佐住職の読経が続くのが恒例だった。

かつて慰霊祭に参列した時「コーランを聞きながらの読経という体験は私だけだろう、ありがたいことです」と伊佐住職は穏やかな表情で語っていた。



日本人納骨堂の看板（上）
ジャティ・プランブラン
墓地内の 日本人納骨堂
（左）

慰霊祭では大使館関係者、日本人会、日本企業関係者などが順に焼香してジャカルタで死亡した先人の霊を慰める。

この納骨堂は 1931 年に 7 人の有志日本人が中心となってジャカルタ（当時はバタビア）市内各所にあった「からゆきさん」の遺骨を集めて一か所に安置、慰霊したのが始まりとされている。

その後太平洋戦争の時代を経て荒れるに任せていたのを 1959 年に日本人墓地保存会が在留日本人などの間から生まれ、これが母体になって整備、慰霊祭が始まるようになったといわれている。

納骨堂内には明治時代の 35 人、大正時代 67 人、昭和時代 153 人、そして平成時代も 1 人の遺骨が納められており、年代不明は 21 人という。

ジャティ・プランブラン墓地そのものは中華系インドネシア人のクリスチャンのほかに、オランダ、イギリスなどの欧州人クリスチャンのお墓が中心だが、同じくクリスチャンのスマトラ島・バタック人のほか仏教徒、ユダヤ教徒もお墓もあるという。

墓地内で最も大きなお墓はオランダ植民地時代の中国系インドネシア人の大富豪の墓というもので、墓というより「霊廟」ともいふべき立派なものだ。

納骨堂内には「故陸軍少将石本五雄」の墓碑のほかに「爪哇（ジャワ）憲兵隊有志」と記された卒塔婆も安置されており、ガラスの中に収められた仏像が静かに守っている。

納骨堂内部で遺骨を見守る仏像



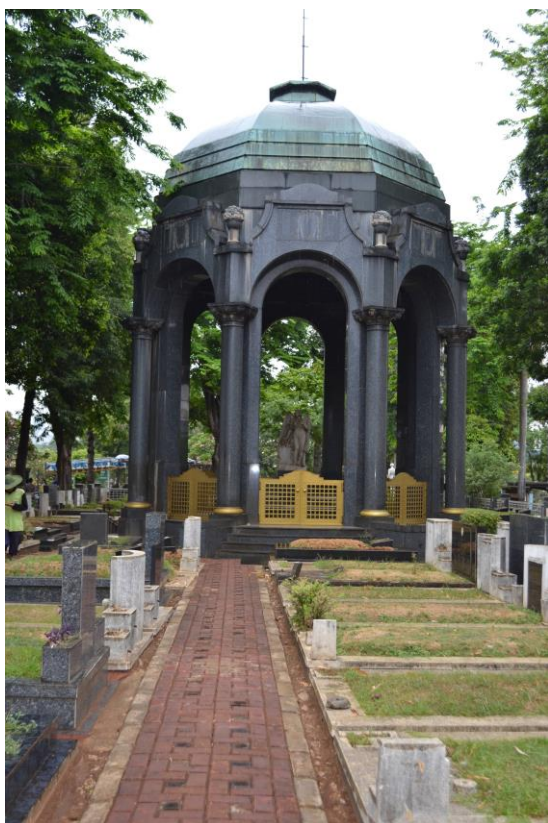
明治時代に亡くなった
からゆきさんらの骨壺



故陸軍少将石本五雄の墓碑
(下段中央)



墓地で一際大きいオランダ時代の
中華系大富豪の霊廟 (下)



爪哇憲兵隊有志と書かれた卒塔婆 (左) と
陣没日本人霊の碑 (右)

